

「思考力」を鍛えるための「問い」の重要性

高松 正毅

1. はじめに

入学式が挙行されてはや10日、中学校の3年間があつという間だったように、高校生活はさらに速く過ぎていくだろう。ここでは、高校卒業後とその後の就職を見据え、現時点ですでに持っていた方がよい心構えと今後日夜積み重ねていくべき努力について述べよう。

2. 必要な学び

2.1 基盤となる「知識」

今世紀は「知識基盤社会 (knowledge-based society)¹⁾」であると言われている。インターネットとICTデバイスの普及により、今やその知識は検索すれば即座に得ることができるようになった。いわゆるGoogle先生である。

知識が重要であることは、論を待たない。たとえば、今日の日本社会・世界情勢について考えることができるのは、日本と世界の地理や歴史、政治や経済、文化等々について知っているからである。人は、知らないこと、よく分かっていないことについては語ることはおろか、考えることすらできない。

そして、必要な知識の獲得は、まずは日々の学校の勉強や受験勉強で十分である。今日の学校教育が行っていることは、主としてその知識の伝授である。そして、高校の定期試験も、大学の入学試験も、その知識の理解度と定着度(記憶保持率)を確かめていると言ってよい。つまり、高校生が学校でしている勉強のほとんどは、受動的かつ一方的に知識を受け取ることである。そして、大学入試に合格するためだけなら、ほぼそれだけで十分なのである。

理解して記憶をする以上、知識の明確化をはかるための質問は大切だが、学習内容は安心して素直に受け取ってよい²⁾。学習指導要領に基づき制作された検定教科書は信頼すべきものだし、試験には模範解答や正解が必ず存在するからである。いちいち疑問を差し挟んでいたのでは無限後退に陥り、理解も記憶もままならなくなる。

ただし、他人が作った問題、ましてや正解(一つか複数かは重要ではない)があらかじめ決まっている問題に答えることで鍛えられるのは反射力や対応力、適応力にとどまり、思考力や判断力、表現力にまではなかなか及ばない。試験問題に解答することで、記憶したことを想起しやすくなることはあっても、新たな知識が得られるわけではない。記述式なら思考力や判断力、表現力が必要かもしれないが、解答することでそれらの力が新たに身につ

1 「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会」(中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像(答申)」平成17年1月28日

2 なお、日々の勉強や受験勉強は、理解力と記憶力さえ高めれば誰もが高得点を得られる。理解力は、知識を増やし類推や対比により高めることができる。記憶力は、反復により高められるが、思い出すことをより意識するなら、ストーリー化や関連づけといったテクニックも活用できる。

くわけではない。

試験問題を出発点として考えるなら、問題を解くのが一番易しい。次に難しいのが、その問題の解き方を他人に分かりやすく解説することである。そして、最も難しいのは、問題そのものを作ることである。つまり、問う力こそが最も根源的な能力なのである。

問題や課題を誰かから与えられ、それに答え続けているかぎり、真の成長はないと心得るべきである。

2.2 求められる「思考力・判断力・表現力」

高校卒業後の長い人生のことを考えると、試験で高得点を得るだけでは足りない。社会人ともなれば、必ずや「思考力・判断力・表現力」が求められる。「思考力・判断力・表現力」を働かせるのに十分な「知識」があることは大前提であるが、知識は適切に運用してこそ、その価値を発揮する。知識は元手であり、その運用能力として「思考力・判断力・表現力」がある³。

だから、「理解力・記憶力」ばかりでなく、「思考力・判断力・表現力」も、今この瞬間から鍛え始めよう。

<能力の用いる順番>

「理解力」→「記憶力」→「思考力」→「判断力」→「表現力」
知 識(の獲得)

さて、上のおり、「理解」して「記憶」した事柄に対し、あれこれ「思考」することにより「判断」し、下された「判断」を分かりやすく「表現」するという流れになる。

「表現力」を獲得するには、実際に表現することを繰り返すしかない。その鍛錬は、口頭と文書の両面から可能である。口頭なら、ディベート・ディスカッション・プレゼンテーション・スピーチを行い、文書なら、意見文や小論文を書くことになるだろう。

いかなる形であろうと、表現するには表現する以前に表現する内容、すなわちコンテンツが必要となる。コンテンツでは、判断して出した答え、すなわち自分の意見(主張や結論)が重要となる。適切な主張や結論を導き出すのに必要となるのが「判断力」である。また、的確な判断を下すには、あれこれ考えを巡らして思考しなければならない。比較するなどしてよし悪しを決めるのに必要となるのが「思考力」である。

意見文や小論文には、自分の「意見」を書くことが求められるが、意見とは、自分の頭で考え、導き出した「答え」である。

意見を出すには「思考力」や「判断力」が必要となるが、思考し始めるのに必要となるのが「問い」である。「答え」を出す以上、それ以前に「問い」が立っていなければならないからである。

<行為の順番>

「事実(知識)に対する問い」→「思考」→「判断」→「表現」

3 文部科学省は「学力の3要素」を提起している。「学力の3要素」とは、(1)十分な知識・技能(2)それらを基盤にして答えが一つに定まらない問題に自ら解を見いだしていく思考力・判断力・表現力等の能力(3)これらの基になる主体性を持って多様な人々と協働して学ぶ態度(高大接続システム改革会議「最終報告」による)である。

思考する出発点には、必ず「問い」があることを憶えておこう。「なぜ」「何のために」「どうして」「どのように」……といった問いのないところに「思考」は生じ得ない。逆に言えば、人は問うことをやめたとき、それ以上はもはや何も考えなくなる。

さて、口頭による訓練のうち、高大連携事業で用いるのがディベートである。では、なぜディベートなのか。

論題にもよるが、ディベートで、まず必要となるのは、ものごとを調べ上げる力である。どうしても事実関係や問題の背景にかかわる「知識」が必須となるからである。

また、上に述べたように問う力も必要になる。問わないかぎり考えられないからである。

ディベートでは、特に論理的な思考力・批判的な思考力が求められる。聴衆やジャッジを納得させられるだけの根拠の提示や理由の説明が必要になるからである。

ディベートで、判断力や表現力が求められるのは言うまでもない。

3. ディベートの論題

ディベートの論題には、「事実論題」「価値論題」「政策論題」の三種がある。

事実論題とは、「宇宙人は存在するか(否か)」のように、ある事実の有無、事の真偽を問うものである。ディベートする以上、論題には未だ真偽が確定していないものを選ぶしかない。ディベートすることによって明らかとなるのは、なぜ真偽が確定しないのか、あるいは何が分かれば真偽が確定するのかである。また、事実論題は専門的な知識がないと議論できない。

価値論題とは、「AI は世界を幸せにするか(否か)」のように単独のものの良し悪し、あるいは「男性が得か、女性が得か」のような対になるものの良し悪し、価値の大小を測るものである。数々の価値の指標が並立することになり、そのうちのいずれを重視するかによって判断が決するため、より重要な指標を提示することに力が注がれる。ただし、その判断基準は、最終的には好き嫌いといった論理的ではないものになりかねない。

以上により、競技ディベートでは事実論題と価値論題が採用されることはほとんどない。次の政策論題こそがディベートの論題だと考えればよい。

政策論題とは、「日本は大統領制を導入すべきである(是か非か)」のように、現在はそうはなっていない状態にある事柄について、現状を改変すべきか否かを検討するものである。現状のままの場合と実行した場合とのメリットとデメリットの「比較衡量⁵⁾」となる。

ディベートでは、必ず肯定側から立論する。肯定側は、当該政策実行の必要性和実行した場合のメリットを論証する。これに対し否定側は、政策実行の不要性和実行した場合のデメリットを論証する。反駁では、互いに相手の論証が成り立たないことの立証を試みる。

4. 「事実」の機能と役割

4 「問い(問題提起文)」は、常に疑問文になるとは限らないので注意が必要である。

5 比較衡量とは、合理的な問題解決のために、当事者や利害関係者の利益その他の公益などを総合的に比較検討すること、またそうすることで、どうすべきかの判断を下すことである。

4.1 「事実」と「意見」の組み合わせ

知識は、すべて事実である。事実とは、一定の時期における確認可能な人々の共通認識である。思考は、事実に対し問うことから始まるが、一方、文章は、下表のように事実と意見の組みにより織りなされていく。

<p>I 事実→意見(帰納的)</p> <p>「凶器に付着していた指紋が一致した」だから「あの男が犯人だ」のように、<u>事実から意見を導き出すもの</u>である。</p> <p>この場合、事実から意見を導き出すこと、および意見そのものが思考である。</p>	<p>II 事実→事実(自然科学的)</p> <p>「ほとんど勉強をしなかった」だから「試験の成績が下がった」のように<u>事実と事実を結びつけるもの</u>である。</p> <p>この場合、思考は接続詞「だから」に集約される。最も緊密なものは因果関係であり、因果に至らないものは相関関係である。</p>
<p>III 意見→事実(演繹的)</p> <p>この場合、先行する意見は「もし～だったら」「仮に～だとすれば」のように、仮定や前提条件、仮説(仮説演繹法)となることがほとんどである。その仮定や条件、仮説に合致する具体例を一つ一つ探していく。</p> <p>先行する意見が他人の意見の場合は、適合する好例を新たに見つけたことになる。</p>	<p>IV 意見→意見</p> <p>他人の意見は事実として扱う。そのため、他人の意見から自分の意見を導けば「I 事実→意見」と同じになり、他人の意見と他人の意見を結びつければ「II 事実→事実」と同じになる。</p> <p>また、他人の意見同士を扱う場合、および自分の意見と他人の意見を扱う場合には、比較対照となることがある。</p>

4.2 「事実」の用い方の例

① 説明を分かりやすくするための具体例

「お笑いのネタに『リズムネタ』と言われるものがある。たとえば、『ラッスンゴレライ』や『ダンソン』、『そんなの関係ねえ』などである。

② 判断を支える根拠としての具体例

「お笑いの『リズムネタ』はすぐに飽きられ、どんなに売れても一発屋で終わる危険性が高い。というのも、8.6秒バズーカ(ラッスンゴレライ)、バンビーノ(ダンソン)、COWCOW(当たり前体操)、藤崎マーケット(ララライ体操)、ジョイマン(ムーミン、永眠)などのリズムネタ芸人は、もはやテレビで見なくなってしまったからである。」

③ 判断を下すための対比・比喩

- ・「自分から狩りに出ないと男はできない!？」←「花は自分からミツバチを探しに行きますか? 探さない、『待つのだ!』」
- ・「元カレのことが忘れられない!」←「あなたは味のなくなったガムをいつまでもいつまでもかみ続けますか? 新しいガムが食べたくない?」